

元禄十六年、水野 織部 長福の見た「勢至菩薩像」

おさもと

秦野 秀明

はじめに

下総国結城の領主水野日向守勝長が、元禄十六年（一七〇三）城主格に列し、結城に築城を命ぜられた。このとき水野家の家老水野織部長福が城地の検分のため、日光街道を通って小山から結城に趣いている。長福はこの間の往復の紀行文を『結城使行』と名付けて世に残した^①。

この水野織部長福の著した『結城使行』の文中にある「勢至の木」に関する記載を引用する。

「また大林村に勢至の木という三またの榎の大木があり、木の根元に勢至菩薩といわれる三体の石仏が祀られている。

このいわれが知りたいものだ^②」

この記載から、水野織部長福が旅した元禄十六年（一七〇三）当時、「日光道中」沿いの「旧大林村」には、「勢至の木」という「三又の榎の大木」があり、その大木の根元には、「勢至菩薩」と云われる三体の石仏が祀られていたようであるが、その後、「勢至の木」と「勢至菩薩」と云われる三体の石仏はどうなったのか、調査を行った。

一 絵図資料

「旧大林村」にあったという「勢至の木という三またの榎の大木」と推定される「絵図資料」が、管見の限り、「二点」存在するので、以下に引用する。

資料①

寛延四年（一七五二）「増補行程記」清水 秋全^③

では、「大里村」と記載された部分の「日光道中」の西側に「大榎有 勢至の木」と申候 古事侍ら寿（ず）（注 解説は大谷 達人氏）との注記と共に、「塚」上に樹木の生えた「塚」の絵が描かれている。

資料②

文化二年（一八〇六）「日光道中分間延絵図」道中奉行所^④

では、「大里村」と記載された部分の「日光道中」の西側に「勢至塚」との注記と共に、「塚」上に樹木の生えた「塚」の絵が描かれている。

二 A家南端路傍の「四体の石仏」とその聞き取り調査

加藤 幸一氏による越谷市内の「石塔・石仏」の悉皆調査である「桜井地区 石仏（平成二十七年八月改訂）」^⑤によれば、越谷市内桜井地区に該当する「旧大里村」には、以下の「石仏」が現存している。

10・ 勢至菩薩像（『越谷市金石資料集』に掲載なし）

所在地 A家（注 個人情報のため省略 南端路傍

石塔型式 舟型（南東向き・高さは中）

年号 元禄十一年（一六九八）

【正面】

元禄十一寅年

（勢至菩薩像）

十一月廿九日



※かつては、地元の人々によって「お勢至様」と呼ばれ、特に目を患っている人が、目の病を治そうと願（がん）をかけてこの石仏の前で拝んだと

いう信仰が見られた。^⑥

11・三猿庚申塔 『越谷市金石資料集』庚申塔八番

所在地 A家(注) 個人情報のため省略 南端路傍

石塔型式 板碑型(南東向き・高さは高)

年号 寛文九年(一六六九)

〔正面〕

寛文九年^{己酉}武州葛飾郡

奉造立石仏講衆中拾三人為二世安穩也(三猿)

□月廿七日□□新方大里村 ※「□月」は「三月」か^⑥

12・釈迦如来像 『越谷市金石資料集』に掲載なし

所在地 A家(注) 個人情報のため省略 南端路傍

石塔型式 駒型(南東向き・高さは高)

年号 天和二年(一六八二)

〔正面〕

天和二年^{壬戌}

(釈迦如来像)

十一月五日^⑥

13・青面金剛像庚申塔 『越谷市金石資料集』庚申塔一七二番

所在地 A家(注) 個人情報のため省略 南端路傍

石塔型式 駒型(南東向き・高さは中)

年号 寛政二年(一七九〇)

〔左側面〕

〔省略〕^⑥

加藤 幸一氏による「桜井地区石仏(平成二十七年八月改訂)」によれば、以下のような聞き取り情報もある。

「以前は、A家(注) 個人情報のため省略)の敷地南方のC家(注) 個人情報のため省略)よりの路傍にあつて「B家(注) 個人情報のため省略)の旧日光道中に面した入口北側」、石仏の向きは南西であつた。平成二十六年現在は、現在のA家の敷地南端路傍にあり、向きは南東になつた」^⑥

三 「勢至塚」とA家南端路傍の「三体の石仏」

資料②の文化三年(一八〇六)「日光道中分間延絵図」^④により、大里村「秀蔵院」と「勢至塚」との凡その「位置関係」と「距離」が推定可能であることから、その凡その「位置関係」と「距離」から推定可能な場所こそが、B家、A家の付近であることが判明した。

その上で、移転後に現在も祀られているA家南端路傍の「四体の石仏」を、「建立年代」順で並べると、

- ① 三猿庚申塔 寛文九年(一六六九)
- ② 釈迦如来像 天和二年(一六八二)
- ③ 勢至菩薩像 元禄十一年(一六九八)
- ④ 青面金剛像庚申塔 寛政二年(一七九〇)

であり、その内、水野織部長福が旅した元禄十六年(一七〇三)より以前に建立された「勢至菩薩像」を含む「三体の石仏」が、水野織部長福の見たものであつた可能性が高いことが判明した。

四 「地引地番図」

さらに筆者は、

資料③

明治九年十月廿二日武蔵国埼玉郡大里村「地引地番図」⁽⁷⁾

を閲覧した結果、図中の「D区域(A家が存在)」と「E区域(B家が存在)」の付近で、「E区域(B家が存在)」に接する「日光道中」に面した「半円をさらに半分にした形の区域」こそが、「三又の榎の大木」が生えていた「勢至塚」のあった場所であり、その大木の根元には、「勢至菩薩像」を含む三体の石仏が祀られていた場所でもあったことが、正確に判明した。

結びにかえて

① 明治九年十月廿二日武蔵国埼玉郡大里村「地引地番図」の図中の「D区域(A家が存在)」と「E区域(B家が存在)」の付近で、「E区域(B家が存在)」に接する「日光道中」に面した「半円をさらに半分にした形の区域」こそが、「三又の榎の大木」が生えていた「勢至塚」のあった場所であり、その大木の根元には、「勢至菩薩像」を含む三体の石仏が祀られていた。

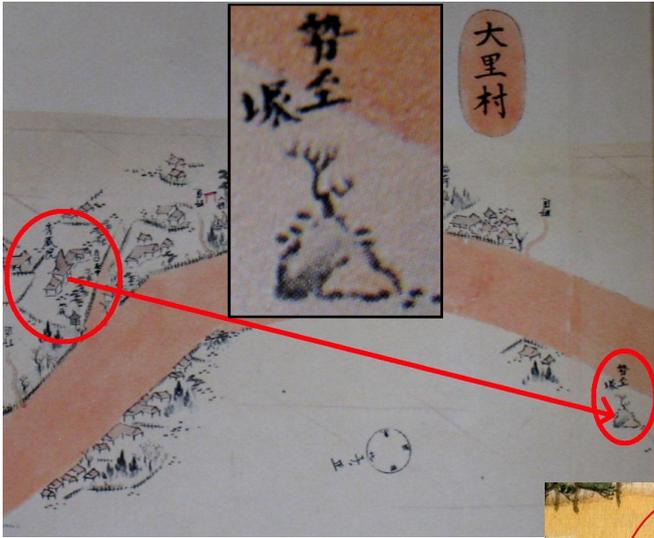
② 現在、「勢至菩薩像」を含む三体の石仏は、A家南端路傍に移転しているが、移転前に祀られていた場所こそが、加藤氏の聞き取り調査で判明していたB家であり、ゆえに、明治九年十月廿二日武蔵国埼玉郡大里村「地引地番図」の図中の「勢至塚」のあった場所と、加藤氏の聞き取り調査で判明していた「勢至菩薩像」を含む三体の石仏が祀られていた場所が、完全に一致した。

注

- (1) 本間 清利(一九七五)『日光街道繁昌記』埼玉新聞社、二〇頁
- (2) 前掲書(1) 二二頁
- (3) 寛延四年(一七五二)「増補行程記」清水 秋全
「国立国会図書館デジタルコレクション」
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/2577825>
- (4) 文化三年(一八〇六)「日光道中分間延絵図」道中奉行所
「東京国立博物館画像検索」
<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E0029458>
- (5) 加藤 幸一(二〇一五)「桜井地区石仏(平成二十七年八月改訂)」
http://koshigayahistory.org/151120_sakurai.pdf
- (6) 前掲(5) 八十四頁
- (7) 明治九年十月廿二日武蔵国埼玉郡大里村「地引地番図」

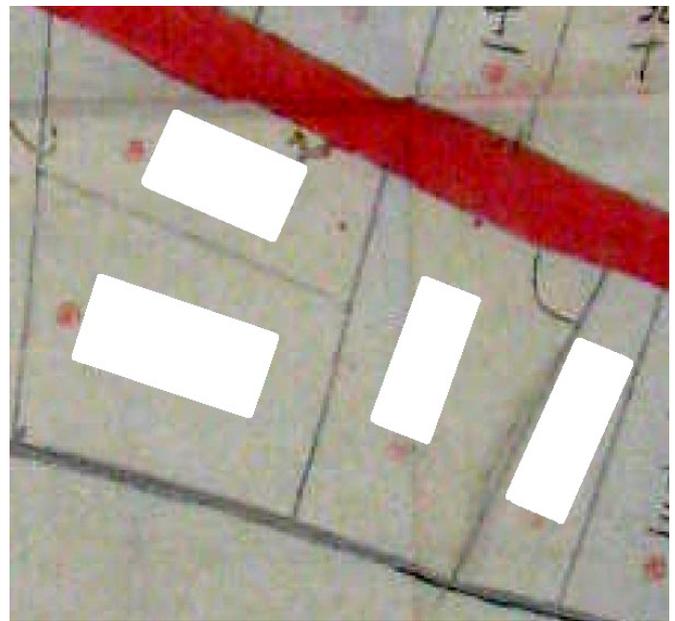
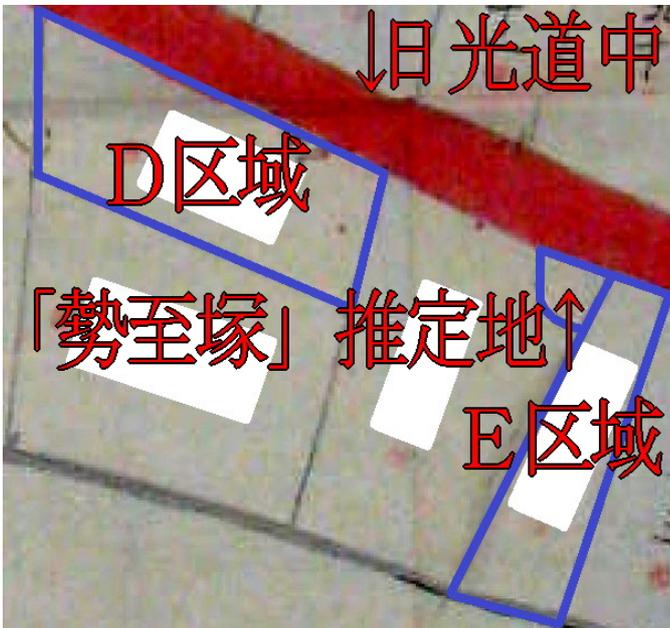


↑ A家南端路傍の「三体の石仏」



↑ 資料②
 文化三年 (1806)
 「日光道中分間延絵図」
 道中奉行所
 「東京国立博物館画像検索」
<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/E0029458>
 に加筆して引用

←↑ 資料①
 寛延四年 (1751)
 「増補行程記」
 清水 秋全
 「国立国会図書館
 デジタルコレクション」
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/2577825>
 に加筆して引用



↑ 資料③ ↑
 明治九年十月廿二日 武蔵国埼玉郡大里村「地引地番図」
 に加筆して引用